

平成21年 6月17日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520155

研究課題名（和文） 古代における田歌の源流についての基礎的研究

研究課題名（英文） A Study on the Beginning of 'Tauta' —Rise Planter's Songs—in the Ancient Times

研究代表者

永池 健二

奈良教育大学教育学部・教授

研究者番号：60237493

研究成果の概要：田植歌と田植儀礼とが隆盛となる以前の、古代における我が国の稲作農耕の儀礼と、その歌謡とはどのようなものであったのか。本研究では文献資料と現存する民俗の両面から実地調査と資料の精査を重ねた。その結果、11世紀以前の古代日本にあつては、田植儀礼に先行して、春の耕作始めにあたる耕田＝田打ちと播種を中心とした耕田儀礼こそが稲作儀礼の一大中心であり、それに対応して歌われる田歌も田打ち歌こそが重きを成していたことを具体的に裏付けることができた。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|---------|-----------|
| 19年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 20年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：古代文学、王朝歌謡、田歌、田打歌、田植歌、耕田儀礼、田遊び、伊勢神宮御神田下種祭

1. 研究開始当初の背景

我が国における稲作農耕の歌謡（田歌）の研究は、主として「田植歌」を中心として進められてきた。中国地方に今日も残る囃田・花田植などの膨大な『田植草紙』系歌謡群に端的にみることができるよう、田植は単なる農事の作業労働であるだけでなく、田の神を迎えて稲の苗の健全な生育と秋の収穫の豊穰を祈願する農耕神事として、きらびやかな風流の行装や意匠、華やかな歌舞・音曲に飾り立てられた「晴」の祭礼として発達し、その歌謡も文芸性に富んだ多彩な歌が豊富に生み出され伝えられてきたからである。

『田植草紙』に対する関心を軸に国文学の歌謡研究と民俗学の両面から活発な研究活動を続けた「田唄研究会」の機関誌『田唄研究』や『田植草紙の研究』（昭和47年 三弥井書店）、牛尾三千夫の『大田植の習俗と田植歌』（昭和61年 名著出版）、真鍋昌弘『田植草紙歌謡全考注』（昭和49年 桜楓社）、渡邊昭五『田植歌謡と儀礼の研究』（昭和48年 三弥井書店）などはその成果の代表的なものである。しかし、これらの成果のほとんどすべては中世末期以降の田植歌を中心とした研究であった。中世以前の田歌の世界に光をあてた研究としては、白田甚五郎の「田歌の流れ」（昭

和 34 年)の古典的な達成がほとんど唯一のものであるが、それととも取り上げられた資料はすべて田植歌に限られている。日本の田歌研究は田植歌に限定して進められてきたのが現状であった。

2. 研究の目的

本研究は、そうした田植歌に偏重してきた従来の研究の反省の上に立って、新しい視座からこれまで言及されることの乏しかった王朝時代を中心とした古代の田歌に光あて、それらを精査考究して、田歌の初源について初春の耕田始めの儀礼と結びついた田打歌の優勢という実態を明らかにせんとしたものである。

3. 研究の方法

本研究は、当初の研究計画に従い、文献資料の調査と民俗行事・神事の実地調査の両面から、次のような方法のもとに、計画的に実施した。なお、研究調査の遂行にあたって研究代表者の指導する大学院生 2 名の研究協力者の協力を得た。

(1) 平安時代における田歌関係資料の収集と整理

① 田歌資料の発掘・収集整理 (19 年度—20 年度)

平安時代の田歌の資料を集成した『続日本歌謡集成』巻一所載の「新編田歌集」等の既存の資料の不備を補うべく、平安時代における歌謡資料全てに新たな検討を加え、『本朝世紀』所載の「志多羅歌」などを増補した信頼できる「田歌」の資料集を作成した。

② 稲作農耕に関わる儀礼行事関連資料と整理 (19 年度—20 年度)

田歌が実際に歌われた稲作作業の現場や儀礼行事の場や習俗との関係の考究を進めるため、神宮文庫所蔵両宮の延暦の「儀式帳」などをはじめとして古代における稲作農耕に関わる儀礼行事等の記事を歴史資料・記録・古典文学作品などから漏らさず精査収集し、整理検討を加えた。

(2) 三重県伊勢地方における神宮文庫所蔵資料及び伊勢神宮関係農耕神事の実地調査

① 伊勢市神宮文庫所蔵の神宮関係年中行事資料及び田歌関係資料の調査 (19 年度—20 年度)

2 年の研究期間中に計 4 回、のべ 5 日にわたって神宮文庫に赴き、資料調査を実施した。「皇太神宮儀式帳」、「建久三年皇太神宮年中行事」をはじめとする神宮関係稲作神事の諸記録及び田歌関係資料を閲覧精査し、次の 6 種の田歌関係資料の影印を収集した。

- ・ 内宮御田祭歌譜 (一門 11460)
- ・ 二所太神宮大御田祭歌 (一門 11432)
- ・ 大御田祭歌神楽歌神楽庭療神楽和哥 (合冊、一門 11385)

- ・ 神楽歌并御田祭歌 (一門 11428)
- ・ 御田之歌 (一門 1927)
- ・ 大御田祭之歌 (一門 1745)

② 伊勢神宮の御神田神事の実地調査 (19 年度—20 年度)

古代的な耕田儀礼の古態を伝える下種祭 (平成 20 年度 4 月 4 日)をはじめ、御田植式 (平成 19 年度 5 月 12 日)、抜穂祭 (平成 20 年度 9 月 2 日)の三種の伊勢神宮御神田神事を実地に調査。詳細な記録と映像資料を作成した。

(3) 九州地方・東海地方に残存する「田打ち」に関わる御田・田遊び神事の調査研究 (19 年度—20 年度)

全国に伝存する御田・田遊びの神事の中でも、田打ちの神事や「志多羅歌」系の田打歌を伝承する行事を重点的に実地調査。多くの文献資料と映像資料を収集、作成した。2 年間に実地調査した行事は次の通りである。

- ・ 平成 19 年 2 月 10 日～12 日 愛知県設楽町田峯の田峯田楽
- ・ 同 3 月 24 日～25 日 熊本県阿蘇市、阿蘇神社の田作り祭り
- ・ 平成 20 年 7 月 28 日 熊本県阿蘇市、阿蘇神社のおん田祭り
- ・ 同 10 月 19 日 佐賀県鳥栖市蔵の上：老松神社の御田舞
- ・ 平成 21 年 1 月 3 日 静岡県浜松市懐山のオクナイ
- ・ 同 1 月 4 日 同県浜松市川名のヒヨンドリ
- ・ 同 2 月 11 日 東京都板橋区徳丸の田遊び (関連)
- ・ 同 2 月 17 日 静岡県藤枝市滝沢の田遊び

4. 研究成果

以上のような研究方法によって収集された各種の資料を慎重に精査し、考究を加えた結果、当初の予測通り、古代稲作農耕儀礼における田打ち＝耕田儀礼と田打歌の優勢という仮説について文献資料と民俗資料の両面から裏付けることができた。

(1) 研究成果の具体的内容

研究成果の具体的な内容を摘記すると次の通りである。

① 今日、伝存する田植歌の最も古い記録は、11 世紀初頭に成立した『枕草子』に見えるものである。同じ頃『栄花物語』1023 年 5 月の土御門第での「田植御覧」の記事では、田主の翁や田人、多数の早乙女たちが登場し、田鼓に笛、ささらの囃子で田を植える様子が描き出され、田植歌らしき歌も記録されている。この二つが今日確認できる最も古い田植歌と田植行事の記録である。

② そうした記録に見える「田植歌」以前にも、「田歌」は存在した。945 年の「志多羅神」の東上に際して歌われたという「志多羅歌」

は、その表現内容から見て、明らかに新春の耕田＝田打ちの行事において歌われた「田打歌」や「種蒔歌」と見なすべきものである。同種の「シダラ歌」は、『皇太神宮年中行事』（1192）に見える「鳥名子舞歌」や風俗歌の「肥後風俗」にも見ることができる。風俗歌の「荒田」「葦原田」「常陸歌」なども、春の耕田に関わる歌謡と思われる。（私見によれば、『薩摩風土記』美裏郡の条に見える「たらちし吉備の鉄」の歌も田打歌—おそらく最古の一と見なすべきものである）。

③古代の稲作農耕に関わる儀礼行事としては、『日本書紀』天智10年（671）5月や『続日本紀』天平14年（742）正月などの記事に見える「田舞」「五節田舞」があるが、残念ながら、その内実は定かではない。今日確認できる最も古い稲作農耕儀礼の記録は、延暦23年（804）成立とされる伊勢神宮両宮の『儀式帳』（『皇太神宮儀式帳』『止由氣宮儀式帳』）に見える「御田種蒔下始」の行事であろう。それによれば、2月の初子の日に禰宜内人らが湯鋤山に入って木を伐り忌鋤を作り、真佐岐纏を頭に付けて山を下り、酒作りの物忌みの父が御田代田を耕し始め、それをもって諸々の神田ならびに百姓の田耕の始めとしたという。この耕田の行事に際しては「田耕歌（たがやしうた）」を歌い、「田舞」を舞ったことも記されている。一方、この両宮の『儀式帳』には、5月の田植行事や予祝としての「田植」行事については、まったく言及されていない。

④この神宮の耕田始めの儀礼については、400年近く下った建久3年（1192）の『皇太神宮年中行事』2月1日の条にも「鋤山伊賀利神事」として見えているが、そこでは御田打の神事は、実際の御田ではなく神宮の殿舎及びその前庭で行われ、手鋤で地を打つしぐさをし、小石を種に見立てて種蒔をし、さらに藁を苗に見立てて田植のしぐさをしている。9世紀初頭には、実際の稲作の作業の工程に従った春の耕田儀礼であったものが12世紀末には一年の稲作の工程を模擬的に繰り返して秋の収穫の豊穰を祈願する予祝的な「遊び」の儀礼へと変化しているのである。

⑤『日本三代実録』の貞観6年（864）3月の条には、太政大臣藤原良房が帝を染殿第に招いて観桜の宴を催した折、山城国司が郡司百姓を率いて耕田の礼を行い、御覧に入れたことが見える。同8年（865）3月にも同様の記事を載せている。ここでも春の耕田御覧が『栄花物語』や後の『中右記』に見える5月の田植御覧の記事に先んじているのである。文献記録に見る限り、日本列島における稲作儀礼の中心は、9世紀初頭から11世紀初頭の間に、春の耕田—田打ち—から田植の儀礼へと大きく転換し、そこで歌われる田歌も、田

打歌へと転換した可能性が見てとれるのである。要するに、文献資料で見ると限らず、「田植」以前の古代の稲作儀礼は、春の耕作始めにあたる耕田＝田打ちと播種を中心とした耕田儀礼こそが中心であったことが窺われるのである。その具体的な姿を伝える大きな手掛かりとなるのが、伊勢神宮の『儀式帳』の記述であり、現行の御神田の下種祭である。

（2）研究の意義と展望

本研究によって明らかになった古代における稲作儀礼の大きな転換（田打ち＝耕田儀礼から田植儀礼へ）と田歌の変容（田打歌から田植歌へ）という事実は、従来の田植え儀礼と田植歌偏重の研究のあり方に大きな反省をせまるだけでなく、さらに稲作儀礼の歴史的な展開や稲作農耕における神觀念のあり方についても再検討を促すものである。

まず第一は、稲作農法の直播法から田植法への転換との関わりである。すでに奈良時代（8C）以前に田植法が広く普及していたことは万葉集に見える幾多の事例からも明らかである。考古学の史料からは、田植法の導入は弥生時代の末期、3～4世紀頃まで翻るとも指摘されている。農法の先進地域であった平安京近辺において、10世紀後半まで田植法が普及していなかったとは考えにくい。一方、田植法の普及が、即座に田植え儀礼の大規模な展開をもたらすとも断定はできない。日本においても、沖縄地方のように田植法の普及の後も長く田植え儀礼の十分な発達を見なかった事例も存在するからである。あるいは田植法の導入後も、かなり長い間、直播法に基づいた春の耕田儀礼の優位は続いていたのではないか。田植儀礼の展開を促す契機は何であったかが、改めて問われなければならぬまい。

第二は、稲作農法における神觀念の変容の問題である。今日の稲作の民俗を支える田の神の信仰が田植の習俗や儀礼と不可分の関係にあることは改めていうまでもない。稲作儀礼の予祝的な性格も、田の神信仰と深く関わって成長してきた。しかし、それ以前の古代的な耕田始めの儀礼を支えていた神觀念は、より古い素朴な信仰や神觀念に根差したものではなかったろうか。聖なる山から切り出した「忌鋤」をもって大地を打ち返す耕田の所作を儀礼の要とする耕田始めの儀礼を、田の神の信仰や予祝の觀念から解き放って見てみると、そこには、大地を打ち敲くという行為によって、その地の神々や精霊を鼓舞し、その力の発動を期待する素朴な呪術的心性が露わに見てとれよう。

これらの諸問題は、日本列島という小さな島国の事例からのみ追究できることはない。狭い学問領域を越え、韓半島から中国大陸へさらには東南アジアの諸地域へと広がる広範な事例を視野にいれながら、学際的、国際

的な共同研究こそが俟たれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 件)

[学会発表] (計 2 件)

永池健二「耕田儀礼と田歌—伊勢神宮の調査から—」

歌謡研究会・比較民話研究会合同研究発表会
平成 19 年度 12 月 9 日 奈良教育大学

永池健二「再興された古代稲作儀礼—伊勢神宮・御神田下種祭をめぐって—」

第 10 回 国際アジア民俗学会国際シンポジウム 平成 20 年 10 月 10 日 秋田県大仙市大曲交流センター

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永池 健二 (NAGAIKE KENJI)

奈良教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60237493

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者